

生文研メール

2号

平成 16 年 12 月 28 日

Ver.1.0.1

生活文化研究所

〒700-8516

岡山市伊福町 2-16-9

ノートルダム清心女子大学

e-mail

ricch@post.ndsu.ac.jp

目次

日本人と海藻のかかわり(2) コンブ利用の歴史	今田節子	1
青い鳥の家族関係学(2)	加藤正春	2
日本の霊場 2 相模 大山(神奈川県伊勢原市)	小嶋博巳	3
体験的生活文化史 昭和編 その二	新田義之	5
武田麟太郎の時代 西鶴研究ごぼれ話 2	広嶋 進	6
不思議な出会い(その二) 図書館での出会い	横山 學	7
編集後記		

日本人と海藻のかかわり(2) コンブ利用の歴史

今田節子

海藻類の食べ方には、それぞれの海藻の特性を生かした、ほぼ決まった調理法がある。江戸時代以前のコンブの使い方や食べ方などから先人の生活の知恵を紹介してみたい。

平安時代の辞書である『倭名類聚抄』には「可食」とあり、コンブは古代から食べられていたことは明らかである。しかし、具体的に食べ方を示したものは少ない。奈良時代末期には献上品としてコンブが朝廷に納められ、平安時代になると交易雑物(奈良・平安時代、政府が諸国から納めさせた織物、海産物、麦豆など)、僧侶の供養料(供養するために寄進するもの)、供御(天皇の飲食物)として使われたことが『続日本紀』や朝廷の制度を記した『延喜式』にみられる。

中世になると『雍州府志』などに、若狭百昆布は非常に味が良く高貴な方が召し上がられるという内容がでてくる。蝦夷と陸奥(現在の北海道と東北地方)という限られた地域でしか採取されな

いコンブが、なぜ若狭の百昆布としてでてくるのか不思議なことである。この疑問を解決してくれる説明が江戸時代の『本朝食鑑』にみられる。それは、松前産(北海道の松前)のコンブを越前敦賀(福井県敦賀市)に陸揚げして若狭に送って加工し、京都に運ぶ内容である。すなわち、若狭百昆布は、蝦夷のコンブが若狭で加工されたものを指していたのである。

江戸時代になると『南留別志』などに、献上品としてだけでなく婚礼や祝い事、節句の供物など、慶賀の品や祝いものに使うという記載が増え、縁起物として利用することが一般的になった様子が見えてくる。では、コンブはなぜ縁起物なのか。古代にはコンブは「ひろめ」と呼ばれ、「おひろめ」の意味に通じる理由から、祝い物として使う習慣ができたといわれる。さらにコンブは味もよく、産地が北海道周辺に限られる貴重品であったことから、ハレの食べ物(非日常食)としての習慣が定着していったものと思われる。

明治時代以降、現在まで、庶民の生活のなかでもコンブは婚礼や正月、祭り、年祝いに欠かせない縁起物として使われている。この習慣は江戸時代に慶賀の品としてコンブを使った習慣が引き継がれてきたものであろう。

コンブの性質は、いずれの時代も無毒で、冷たく、塩からいが味は良いとしている。これらの性質がどのように料理に生かされてきたのであろう

か。室町中期の『尺素往来』には、「明け方の粥の副菜に焼いたコンブを、お茶請けに結びコンブを用いる」とある。食べやすく切ったコンブを火にあぶったり、結びコンブにして煮たり、揚げたりして食べたものと思われる。江戸時代の『本朝食鑑』や『和漢三才図会』には、コンブはいつも台所に用意しておき副食に使う、茶会には菓子として使う、精進の日には鰹のだしの代わりにコンブだしを使う、僧侶の家でもコンブだしで煮物を作る、小さく切ったコンブを揚げ物や煮物に使ったといった内容が記載されている。やはり、コンブは精進材料として扱われている。また、コンブを菓子に使うのは、江戸時代の茶会には椎茸やコンブの煮物などが菓子として使われていたからである。詳しい作り方は不明だが、コンブをだし材料とする、煮物や揚げ物にするなど、現在の調理法と基本的に同じである。

また、コンブの産地と形態や品質の差については、江戸時代の『和漢三才図会』や絵入りで各地の産物を示した『日本山海名産図会』には次のような解説がある。松前宇賀コンブは細くて薄く、色は黄赤色で味は最上ではほのかな酸味を帯びる、津軽産は厚手で味は劣り、南部産はやや黒くて味も劣る等である。これらの品質の差を考慮した食べ方が工夫されていたようで、津軽産のコンブは分厚く味が落ちるので、火にあぶったり、揚げ物にすると美味しいとあり、旨味が濃厚か、淡泊か

品質が良いかどうかなどを判断して食べ方が工夫されていた。

すでに江戸時代には「索昆布」、「細昆布」、「広昆布」、「青昆布」など、コンブの加工品が作られていた。コンブが海路を運ばれ、陸揚げされた地域で加工業が発達しているのは興味深い。現在でも敦賀などの北陸本線沿いにはコンブの加工業者の看板を多く見かけるし、コンブ加工の老舗は京都ではなく大阪に多い。これは江戸時代以前の物資の流通を大きく反映したものである。江戸時代初期には、北海道周辺で採取、乾燥されたコンブが海路で運ばれ、まず若狭の敦賀に荷揚げされた。そこでコンブは加工され、コンブロードと呼ばれる敦賀から京都に通ずる流通経路を運ばれ、消費地である京都に入ってきたという歴史がある。江戸中期頃になると、松前から日本海、瀬戸内海を通って大阪の堺へコンブが直送されるようになり、大阪はコンブの集散地として、コンブ加工の中心地として発展していった。

このように、古代から近世においては、コンブは税、献上品、供養料、縁起物として価値が高く、食材料としての利用は行事食としての利用であった。とくに江戸時代には利用が拡大し、上流階層だけでなく民間にまで習慣が広まっていった。コンブの食習慣はコンブの流通と共に民間に広まり、近世以降、日本全国に受け入れられたものと思われる。

〔参考文献〕

『故事類苑』 植物部 普及版、吉川弘文館、一九八

五

『毛吹草』 新村出校閲・竹内若校訂、岩波書店

一九四三

『諸本集成倭名類聚抄』 本文編、京都大学文学部

国語学国文学研究室編、臨川書店、一九七七

『日本山海名産図会』 第一巻、日本産業史資料

(一) 総論、浅見恵・安田建訳編、科学書院、

一九九二

『本朝食鑑』 一巻、人見必大著・島田勇雄訳注、

平凡社、一九七六

『和漢三才図会』 一七巻、寺島良安著・島田勇雄

・竹内淳夫・樋口元巳訳注、平凡社、一九九一

今田節子『海藻の食文化』、成山堂書店、二〇〇

三

青い鳥の家族関係学(2)

加藤正春

家族関係あるいは家族関係学という科目は、戦後の学制改革のなかで家政学の領域に持ち込まれた新しい科目である。また、その家族関係という科目自体も、アメリカ力で新しく生みだされた研究領域であった。この間の事情を梅木茂は次のように述べる。「家族関係学の歴史は一九二〇年代のアメリカで社会学と心理学の研究成果を背景にそ

の協力によって始まったとされる。わが国における研究は、第二次大戦後の学制改革で新制大学に家政学部が開設された際に、GHQの一部局CIE（占領軍民間情報教育局）の示唆によって、その設置基準に「家族関係（family relations）」として取り入れられたことに始まる」（梅木 1996: 169）。

一九二〇年代にアメリカで開発された新しい学問が、新制大学の家政学部で家政学の一環として教えられることになった。それは、戦前からの日本の家政学研究の伝統に根をもつことのない、全くの新設科目である。その教授法について、当初は手さぐりの模索が続いたようである。初期に発刊されたこの科目のテキストは、一様に教授者の困惑を伝えている。たとえば、一九五六年に『家族関係』というテキストを刊行した桑田百代は、テキストの「はしがき」で次のように述べる。「家族関係に興味を覚え初めてから今年（筆者注 一九五五年）で八年になる。この八年は、考えてみれば短い期間ではあるが、又日本の家族関係の歴史から考えると、ちょうど同じ年数になってくる。」

家族関係が、終戦後のあの混乱した社会のさ中に、日本の家政学に持ち込まれてきた時、家族関係という名前さえも珍しいのもので、一体なにから手をつけてよいか分らなかつた。どんな内容を、どんな方法で勉強し、それを家政学にどのように

関連づけさせたらよいものか、五里霧中で、私は関係がありそうだと思う本を、文学書といわず、科学書といわず、手あたり次第に漁って、おかまいなしに読んでいったものである。というのは、家族関係としてまとめられた本は、日本中に一冊もなかつたからである」（桑田 1996: 17）。

一九五一年に『家族関係新講』を著した大元茂一郎は、「講和全権羽田空港に到着のニュースをききつつ」と識に付記されたそのテキストの「自序」で、次のように述べる。「家庭科の一分科たる『家族』は従来の『家政』の内容にはなかつたものである。（中略）私は文部省の示せる要項や既出の二、三の高等学校教科書を参照し、一つのカリキュラムを作成し学生を指導し、又婦人文化会や女子青年団などに向つて講義をした。その都度諸書を渉猟して指導案・講義案をつくつて之に臨んだ。ために近頃漸くその導き方が手に入った心地がする。そこで私の蒐集編纂した材料を活字化して、同志の坐右におくるならば、「同志の労力が幾らか省けるであろう」といふ老婆心にそせられ、（中略）おこがましくも本書を公刊することにした」（大元 1951: 17）。

これらの記述は、「家族関係」という未知の科目を講義する講義者の困惑と、テキストへの希求を伝えている。桑田はおそらく五〇年代になってアメリカ留学を行ない、そこで学んだ家族関係関連の情報をそのテキストに込めているようである

が、そのことも含めて、初期のテキストにはその作成者たちの努力のあととその時代の特質が個性的な形で表出されている。ここではまず、そのようなテキストのいくつかを検討して、家族関係（学）導入当初にこの学問領域で何が教えられたのかをみることにしよう。

手許の家族関係学テキストの文献目録によると、もっとも初期のテキストは、幸坂佐登子による『家族関係の解説』（有隣書房、一九四九年刊）のようである。しかし、私はこれをみていない。以下では、幸坂に二年遅れて刊行された大元のテキスト『家族関係新講』を検討の対象とすることにしよう。（二〇〇四・一一・二五）

〔参考文献〕

梅木茂「家族関係学」『事典 家族』、比較家族史学会、弘文堂、一九九六。

大元茂一郎『家族関係新講』、地球出版株式会社、一九五一。

桑田百代『家族関係』、高陵社書店、一九五六。

日本の書場2

相模 大山（神奈川県伊勢原市）

小嶋博巳

武蔵の国から東海道を西へ向かえば（近代以前の言い方なら「上れば」）相模の国、現在の神奈川県である。じつは川崎市域のすべてと横浜市域

の大部分は武蔵に属していたから、相模イコール神奈川県ではないのだが、おおきくは両者は重ねて考えてもよからう。この国の霊場には、古代以来、東国を代表する聖地の一つであった箱根（箱根町）があり、天狗を祀ることで知られる道了尊（大雄山最乗寺・南足柄市）、一宮の寒川神社（寒川町）、それに鶴岡八幡宮をはじめとする鎌倉の古社寺や江ノ島（藤沢市）などもただちに思い起こされる。しかし、ここではとくに江戸期に多くの民衆の信仰を集めた大山を取り上げてみよう。東京に向かう上りの新幹線が小田原駅を過ぎて五分も走った頃、進行方向左手に丹沢山系の山々が現れ、そのなかに、鋭角ではないが美しい三角形の稜線をもった、ひときわ目立つ山がそびえている。大山（標高二二五メートル）である。「大山」は中国地方のそれは「だいせん」だが、「こちらはおおやま」と読む。この山頂に大山阿夫利神社の上社、ケーブルカーが通う中腹に下社が鎮座している。さらにケーブルカーの起点である追分駅から麓にかけては、かつて御師と呼ばれた五〇余軒の旅館が並び、門前町がある。大山は別名、阿夫利山、雨降山とも呼ばれる。「あふり」の語源は諸説あるが、「この山は相模湾の海洋気象の影響を受けやすいため、そこに湧き起る雲が天候の変化をはかる目安となっていた」とい、雨を降らせる山の意味で雨降山と呼ばれたとする説明がわかりやすい。また、その山容は

相模湾上からもはっきり識別され、船が自分の位置を知るための山あての山でもあった。他方、伊勢原市・平塚市などには、人の死後百日めまたは百一日めに山麓の茶湯寺に参る習俗があつて（参ると死者に似た人に会える、石仏中に死者の顔がある、などという）、ここが死者たちの霊の赴く山でもあったことを窺わせる。山に対するさまざまな信仰が集約的に向けられた典型的な山岳信仰の山、その意味で「大」という美称のふさわしい山、と云つてよいであらう。祭神・大山祇神は、すなおに山の神の意に解するのが正しいと思われ。

明治の神仏分離に際して平田派国学の影響のもとに徹底した神道化がはかられたため、今日の社域にはその痕跡はほとんどないが、長い歴史時代にはここは仏教勢力が管轄する霊場であつた（これは日本の霊場の通例である）。一山は大山寺と号し、現在の下社の位置に本堂がおかれ、山頂の社は石尊社（石尊大権現）と称していた。縁起では、天平勝宝四年（七五二）、東大寺の良弁が山頂付近で生身の不動明王の石像を感得し、のちに三年間この山に住して伽藍堂舎を整え、寺を開いたといふ。中世にはあまたの社僧・修験（山伏）が山内に住し、関東地方の修験道の一つの中心地であつた。

大山に対しては源頼朝や後北条氏・徳川氏などの権力者も篤い崇敬と外護を寄せたが、特筆すべ

きは江戸の町人を含む関東地方の民衆の信仰である。江戸幕府は妻帯しない清僧のみに山内居住を許し、修験には下山を命じたので、彼らは御師として麓に門前町を形成し、関東一円の村々や江戸の町に大山講・不動講・石尊講などと称する信仰集団を組織していった。御師の数は近世後期の史料に一六六軒とあり、講の数は明治初期の史料によれば関東とその周辺に一万五〇〇〇余、講員（檀家）数で約七〇万戸を数えている。御師の職能は、各地の講をまわつて石尊大権現の祈祷札と土産を配り、志を徴収するとともに、人びとを大山参りに導き出し、みずからの宿坊に泊めることであつた。ことに山頂の石尊社までの登拝が許された旧暦六月末から盆の期間は、「六根清浄、お山は晴天」の掛け声とともに登拝する人びとで山はたいへんな活況を呈した。そこには、この山を雨乞いの山、天候を支配する山として信仰する農民も、豊漁と海上安全を祈願する漁民も、授福防災を願う町人もあり、また一人前のおとなになるための成年儀礼として登つてくる若者たちも含まれていた。若者たちは下山後、南の藤沢や江ノ島または北の八王子の遊所で精進落としをして帰村したといふ。こつした大山参りの人びとの利用する道は「大山街道」「大山道」と呼ばれ、大山を中心に放射状に幾筋も延びていた。現在の都心から青山・渋谷・三軒茶屋・二子玉川などを経て厚木方面に向かう国道二四六号線、通称「にいよん



神奈川県農林水産情報センターのサイトより

(<http://www.agri.pref.kanagawa.jp/camera1/html/index.asp>)

ろく」は、江戸や房総の民衆にもっともよく利用された大山街道である。

ところで、平塚市にある神奈川県農業総合研究所から遠望する大山の姿を、ウェブ上のライブカメラで見ることが出来る。過去数か月間なら、特定の日の三〇分ごとの映像も、カタログ風に眺められる。神奈川県農林水産情報センターのサイトの、気象観測情報データベースのページである。どのような意図かは明記されていないが、かつて相模の農民たちがこの山に託した思いを忘れないでおこうということならば、なかなか味な企画ではないかと思う。

体験的生活文化史 昭和編 その二

新田義之

私が笠井尋常小学校に入学したのは、前記のように昭和十五年四月である。この頃はこの学校では未だ複式学級制度をとっていた。いわゆる過疎地帯ではないのに、一つの学校で引き受ける児童数が少なく、一学年の人数が二十人程度だったからである。複式学級とは一年生と二年生が同じ教室で一人の先生から授業を受けるシステムを言ったが、私の出た小学校には一・二年組、三・四年組、五・六年組という三学級しかなく、体操と音楽の授業は講堂で行われた。講堂とは朝礼を始めとする色々な儀式が行われるホールだが、音楽や体操の授業に使われ、休み時間には子どもたちの遊び場となる、いわば校内で最も賑やかな場所でもあった。

複式学級では一人の先生が同時に二つの学年を教えるので、先生が下の学年を教えている時には上の学年は自習をしている。逆に先生が上の学年を教えている間は、下の学年の自習時間である。自習とは言いながら、実際には先生の話を二つの学年が同時に聞いているのだから、上の学年は去年習ったことをもう一度勉強し、下の学年は来年習うことを今年のうち学んでおくことができる。覚えの悪い子は同じ事を二度学習し、覚えのよい子は来年習う学習内容を知ることができたのだから、学習効率も大変良かったと思う。当時は国定

教科書といって日本全国で毎年同じ教科書を使っていたから、その点でも子どもが同じ内容を一度学習するのに、大変便利だった。その上、児童数が百人前後の小規模校では先生の目がよく行き届くし、遊び時間には同じ家の兄弟姉妹も近所の友達も皆一緒だったから、学校も家庭の延長のような雰囲気だったと言えよう。現在はやたらに学校統合をして、教師が児童全員の名前を覚えることなど不可能な大規模校を作っており、また猫の目のごとく方針を変えて、教科内容を増やしたり減らしたりしているが、それで却って教育の質を損なっているのではなからうか。社会の要求する教科内容をという圧力と、余裕ある教育をという要請との間に揺れながら、理論的根拠も実践的裏づけもなしに、教科内容と授業時間がいじられる時代は不幸である。それよりはむしろ、牧歌的だが安定した暖かい教育環境が残っていた頃の方が、教育効果は格段に良かったのではないだろうか。

ところが、この桃源郷的な教育風土は、私の入学後わずか一年で消え去った。昭和十六年四月にこれまで尋常小学校と呼ばれていた学校が、国民学校初等科と改称されたのである。これまでの高等小学校は国民学校高等科となった。ただし初等科が六年、高等科が一年である点は、実質的に従来の尋常小学校および高等小学校の時代と何の違いもなかったし、文部省の長年の懸案であった義

務教育八年化が、名称の改定とともに達成されたわけでもなかった。改称の目的は、中国および南方諸国への戦線拡大と、間もなく勃発の予想される日米戦争の準備のために、「皇国の道に則りて初等普通教育を施し、国民の基礎的練成を為す」ことにあつたのである。

それから後の学校生活はひどかった。特にこの年の十一月八日に、日本とアメリカとの間にいわゆる太平洋戦争が始まつてからは、校長が部隊長に、男性教師が下士官になつたかのよつに、学校は軍隊組織そのままという雰囲気になつた。勿論男性の児童は兵卒だから、六年生が上等兵、五年生が一等兵、四年生が二等兵、三年生が三等兵、二年生と一年生は新兵である。そして毎日竹の棒を銃に見立てて行進したり、銃剣術の真似をしたりした。

戦争が中期から末期に近づくと、私たちは歩兵から農兵に代わり、食料増産のために山林を開墾する仕事に狩り出された。これまで鋤を持つたことのない私には、松や杉を切り、その根を掘り出し、畑にする作業は辛かった。その上、国内で生産される農産物の相当部分が、外地で戦う軍人たちの食料として徴発されたので、日常に食べられるものが極端に不足し、お米や肉、魚はもろろんのこと、小麦やサツマイモ、ジャガイモなどもほとんど手に入らなくなつていた。疲れて家に帰つても、大根を賣の目に刻んだのを僅かの米粒と混

ぜて炊いた雑炊ぐらいしか食べられない状態だったので、多くの友達が倒れ、病死していった。私たちより少し年上の、中等学校（旧制）程度以上の男女は軍需工場に送られ、アメリカの飛行機に爆撃されて死んだ人も沢山いた。志願兵となり、予科練習生となつて特攻隊に加わり、戦死した者も少なくない。

この時代の女性は、母親も女教師も女子生徒も本当に苦しかったと思う。当時の私がまだ幼かつたために、断片的な記憶しかないのですが、その詳細を描くことはできないが、当時の記録を読むと胸の潰れる思いがする。

私の家は金沢市の近くにあつたので、本当の爆撃は体験していない。しかし隣県の県都である富山市がB29爆撃機群に襲撃され炎上壊滅したときには、富山の空が赤々と炎を反射するのが、遠く離れた金沢からはつきり見えた。東京が灰燼と化し、広島と長崎に原子爆弾が落とされて、日本は敗れた。敗戦の勅語が放送されたのは、昭和二十年八月十五日のことである。

敗戦後、国民学校は再び小学校にもどり、鬼部隊長だった校長が民主主義者に変身した。私は敗戦の直後に肋膜炎を発して一年間休学し、次の年には学校制度が変わつて、いわゆる「六・三・三・四制」が敷かれた。従つて一年遅れで小学校を卒業した私に、思いがけなくも新制中学校第一期生の名譽が与えられることになった。ちなみに、

新制中学とは高等小学校がそのまま教師陣とともに移行し、改称したものである。

この時代について、まだまだ書いておきたいことがある。例えば戦前までの地方文化の姿や、それを支える土地経済システムなどであるが、もう紙数が尽きたので、次の機会に譲ることにしよう。

武田麟太郎の時代 西鶴研究ごぼれ話 2

広嶋 進

先日、写真家の土門拳の随想を読んでいたら、そのなかで土門は愛読した作家として、志賀直哉、武田麟太郎、トーマス・マンの三人の名前を挙げていた。右の三人のうち特に武田麟太郎の名前に意外な感じを受けた（志賀直哉先生）。

志賀直哉やトーマス・マンは知る人も多く、現在その多くの作品がいくつかの文庫本になつていて、読者も多いであろう。しかし武田麟太郎は、『日本三文オペラ』（昭和七年）が講談社文芸文庫に入っているぐらいで、簡単に作品も読めない。今日ではほとんど忘れられた作家となつている。しかしながら、麟太郎は一九〇四（明治三十七年）生まれのプロレタリア作家で、昭和初年に多くの若者に読まれ、人気があつた。土門が一九〇九年（明治四十二年）生まれであることを考えると、麟太郎を愛読作家の一人に挙げるのは、あるいは当然のことなかもしれない。

私の恩師の一人に暉峻康隆先生がいる。先生は一九〇八年（明治四一年）生まれで、戦後の井原西鶴研究の第一人者であり、近世文学の研究者、啓蒙家であった。先生の名著『西鶴 評論と研究』（中央公論社、昭和十三年、二十五年刊）などを讀むと、その論理展開や個性的な文体に土門拳の写真と同質のものを私は感じる。

先生はまたプロレタリア作家の武田麟太郎と、個人的に親しかったようだ。そして、昭和になつて、西鶴の『世間胸算用』の価値を再発見し賞賛したのは、研究者ではなく、実は作家の麟太郎だった。暉峻先生は、西鶴の町人物を高く評価し、近世文学史上に正当に位置付けたことで知られるが、その町人物論は麟太郎などのプロレタリア文学の価値観と読解の影響を強く受けて成立している。このことは、今日の西鶴研究者に残された課題でもある。

土門拳は一九〇九年生まれだが、一九一〇年（明治四三年）生まれの映画監督に黒沢明がいる。土門も黒沢も共に二十歳代を昭和の初年に送り、プロレタリア芸術運動や文学運動のただなかで青春時代を過ごしている。土門の「焼芋泥棒」などの戦後の作品、『筑豊のこどもたち』の写真群や、黒沢の貧民を対象とした群衆劇『七人の侍』『どん底』『赤ひげ』は、一般に社会派リアリズムの作品と言われているが、私は両人が影響を受けたプロレタリア芸術の昇華であると見た方がよい。

うに思う。

昭和初年にモダニズムの洗礼を受け、自己形成した作家や芸術家は、同時に麟太郎をはじめとするプロレタリア芸術運動とのかわりのなかで、自分の創作行為の方向性を見出していつている。一九〇八年生まれの暉峻康隆、一九〇九年生まれの土門拳、一九一〇年生まれ黒沢明。これらの三人は一九〇四年生まれの武田麟太郎の弟たちと言つてよいのかもしれない。

不思議な出会い（その二）

図書館での出会い

横山 學

これまで、いろいろな図書館に出入りしたが、一番多くの時間を過ごしたのは、学部頃から通いながれた図書館だ。そこは、恐らく私立大学の中では最も多くの蔵書を誇っていたであろう。しかし閉架式のため、学部学生はカウンターで目的の図書名を「閲覧希望用紙」に記入し、図書館員が書庫から探し出してくれるのを待つのであった。巧く見つけれないときは、再び用紙に記入して請求する。一度に請求できる件数は限られている。目的の図書にたどり着くまで、何度でもこれを繰り返す。待っている間は、とても、椅子に座つてなどは居られない。図書カードを漁る。書名から、著者名から、何でも思いつくままにカードを

めくる。予期せぬ書名が見つかることがある。こんな本が出されていたのか。この人がこのような本を書いたのか。このような時代に、こんな本が書名で探したときには見つからなかった物が、「青カード」（編纂物の詳細目次）の古めかしい、しかし几帳面なペン字の中に見出される。図書カード・ボックスの一角を、鉛筆とメモを片手に動き回る。やがて、一抱えの図書がカウンターに集められ、名前が呼ばれる。内容を確かめて、あてが外れていると直ぐに返却する。出納係りの図書館員とは顔見知りになる。目的の図書に出会えなかった時、こちらの落胆を見て、「外れかい?」、言葉に出さずに同情をくれる。

図書カード・ボックスの場所は、出会いの場でもあった。退職された先生や、卒業した先輩が同じようにカードを繰っている。知り合いの図書館員が、「あのコートを着ている人が名物先生の誰々だ」とか、「あのオジサンは校友で、何々新聞の論説者だよ」とか耳打ちをしてくれる。隣で同様の作業をしていた人が突然に、「時々見かけるが、君は何を探しているんだい?」と、カードから目を離さずに話しかけてきた。顔を上げると、授業を受けている教授のひとり。教室の外で話すのは初めてだ。簡単に自己紹介すると、「それなら、この書名で探してみるといい」と、ぶつさら棒な返事。会話はそれだけだ。結果は的中。謝辞を述べると、黙って微笑んで下さる。

参考図書の部屋との付き合ひも長かった。部屋の周囲の壁には、全国の大学や図書館の蔵書目録、百科辞典、人名辞典、国書総目録、字引き、辞書などなど、必要な図書が並べられている。入り口の片隅には図書館員が交代で詰め、参考資料の用い方について適切なアドバイスをくれる。親切で丁寧。「ここに来れば、何か手がかりが得られる」。そんな期待でいつも出かけた。

当時は、複写機が導入されただけで、一枚が五十円。一ヶ月の生活費が現在の八分の程度であったから、厳選して複写する。しかも、その複写物は数年経つと脱色して文字が読み難くなる。早く頭の中へ消化せよというわけだ。

大学院に進んでから良く利用した部署は、「マイクロフィルム資料室」であった。図書館の創立時には館長室であった部屋だった。今日では想像もできないほどの旧式の、アンモニアの甘酸っぱい匂いをする紙に、文献の像が焼き付けられる。これも、一枚五十円。三十五ミリのフィルムに収められた全国の統計資料、特別図書、外務省の古い記録、何千冊もの内容が、フィルム・リールに巻かれて眠っている。勸を頼りに、フィルムに目を通す。暗い部屋での、ひたすら暗い作業。こんな部屋には、変わりものが入り出す。図書館員も個人的であった。『明治開化小史』の著者でもあった田口卯吉の孫に当たる田口親(ちかし)さん、勝海舟や大隈重信、長谷川如是閑との関係を、卯

吉の時代の思い出話として時々話してくださいました。「歴史の中」に遊ぶ心地がした。授業を受けたことは無いけれど、この部屋で親しくして頂き、卒論の調査を下さった洞富雄教授は、当時は戦中期の研究中で、マイクロフィルムを目的にこの部屋の常連者であった。民俗学から始まり、「種子島銃」「北方領土問題」「南京事件」。その関心の広さに、翻弄される。あるとき、「これから神田の日本大学図書館で巻物の鑑定をするが、君も来るか?」と誘っていた。願っても無いこととお供した。「ペリー来航」を描いた極彩色の絵巻物。黒船と鼻高に描かれた人物。初めて間近に見たこの絵巻物は、今も記憶に残っている。

ひとの縁とは不思議なものだ。共にこの洞教授の学生であるということ、照山越子さんに出会った。照山さんは、「英国人・ジャーナリスト・日本研究家のフランク・ホーレー」の秘書を戦前・戦後期に務めたひとで、その後の研究に大きな力を与えてくださった。

他の大学院に進学してからも、この大学の大学院研究生として利用を続けた。今度は、書庫に自由に入ることができる。どこの書棚にも、閉館までは何時までも。一度、入庫すると出るのが惜しく、食事も抜いて書棚を散策する。ポケットのチヨコレートを密かに口に運ぶ。色々なことを、脈絡無く頭に浮かべながら、書架の間を泳ぎまわるのは何と楽しいことか。古い紙の特徴のある臭い

が満ちている。薄暗い書棚の金の背文字が不思議に目立つ。旧蔵者から寄贈された個人文庫の図書には、独特の雰囲気がある。持ち主の蔵書印が小さな印が付されている。そんな本を捲ると、書入れや当時の新聞の切抜きが、そのままに入っていることがある。旧蔵者とその図書の結びつきを想像するのは、楽しいひと時だった。図書カード・ボックスの前で出会っていた教授と、書庫で会うことがあった。書庫に入れるようになったことを喜んで下さるような微笑みを憶えている。親しく教えを乞うたことはないが、新しい窓を開いて見せてくださるような御著書から、吹き込む風を常に感じている。

恒例の生活文化講演会を開催しました。

平成十六年 十月二十七日(土)二時~四時

講師 浦 典子(ローウイデザインCOO)

演題 永遠のヒットメーカーレイモンド・ローウィ

編集後記 卒業論文執筆の学生たちが提出を終えて、研究所「演習室」を訪れなくなりました。つい一週間前までは、夜遅くまで必死で取り組む姿に励まされ、一緒に論文を書いているような錯覚にとらわれていました。来る春には、また新たな学生たちが、新しい課題を抱いてやって来ることでしょう。「生文研メール」も、年内に第二号の発信が叶いました。(Y)